
地獄の生存者

侯華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄の生存者

【Nコード】

N4075D

【作者名】

侯華

【あらすじ】

「生存者」地獄の生存者とはいったい何なのか・・・

第一話「地獄」

ここは地獄。

自殺したり、大きな犯罪、殺人を犯した人達が集まり、裁かれる。

私は自殺をした人たちの一人。「佐々木 風香」「ササキ フウカ」
毎日がイヤになって死んだ。いじめ。親。友達。すべていらなくな
った。好きな人にも振られ、
もうすぐ私も裁かれる。

しかし、周りを見るとおかしな場所があつた。柵に囲まれていた。
そこには4人の男女がいた。犯罪を犯したようにも見えない。自殺
したようにも見えない。しかし、4人の共通点はひとつ。「全員高
校生」ということ。私も高校二年だった。

こんな事を思っている間に、私が裁かれる番だった。私の前に裁か
れた人は・・・どうなったんでしょう？

私は聞いた。

「アノ人たちは何なんですか？」

するとマスクをした兵士が答えた。

「生存者だ」

「生存者？」

地獄は死んだ人が来るところ。「生存者」＝「生きている」と同じ
ではないか。

「ナンなんですか？生存者って？」

すると、裁判官が答えた。

「また生き返るために試練を乗り切る物達だ」

私は耳を疑った。

へ生き返る？自分から地獄の道を選んだって言うのに？」

「お前も行くのだぞ？生き返るための試練「生還試練」に」

私は首を振った

「行きたくありません！自分から地獄に来たのに・・・」

裁判官が

「じゃあ、魂が燃え尽きるまで、焼かれないのか？」

そう、私の前に裁かれた人間は、「焼き地獄」に連れて行かれ、まだうめき声が聞こえている。

「焼かれるより、試練のほうがましかもしれない」と思った私は「わかりました。試練を受けます」

と軽く言った。

裁かれた後、兵士に手を引かれながらアノ柵の中に入れられた。

「あなたは何をしたの？」

と背の高い女性に問われた。

「自殺しました」

というと、皆は首をかしげた。

「なんで皆、高校二年で、自殺した人たちなんだろう？」

そう、この人たちも「自殺」した。というのだ。外見からは、人気のある、美男美女のような感じだった。

背の高い女性が

「私の名前は「風森 椎名」かぜもり しいな」よろしくね！」

眼鏡をかけた女性が

「私、「七森 紗希音」「ななもり さきね」と申します」

ジャージを着た男性が

「俺、「結城 真治」「ゆうき しんじ」ヨロシク」

小柄な可愛い顔の男性が

「僕、「風紀 優斗」「ふうき ゆうと」です」

皆、とっても優しい顔をして、笑顔があふれていた。皆、本当に歓迎してくれているように見えた。

しかしそれは、「不幸」の前触れだった。

第一話「地獄」(後書き)

続きも見てね！

第二話「自殺」

私達は待ち続けていた。

「何か」を

私達が出会った後、兵士がこう言い残したのだ。

「何かを待て。来れば試練が始まる」

椎名が言った。

「そういえば。皆、なんで死んだか聞いてないよね？これ話してれば「何か」も来るんじゃない？長くなりそうだし・・・」

紗希音が言った。

「そうですね。暇ですし」

真治が

「たしかに。聞きたいな」

優斗が

「皆さんの事知りたいですしね」

私は乗り気じゃなかった。どうせ皆同じだと思ったからだ。

「じゃあ私から話す！！」

椎名が言った

「私は、バスケット部で、全国大会を狙っていた光臨学園のキャプテンだった。毎日毎日きつい練習で、選手励ましたり、いろいろな事に気を使っていた。だけどもある日、転校生がやってきた。その子は名門惺窩へせいか、学園からやってきた。そのバスケ部のキャプテンだったそうだ。もちろん選抜のメンバーになった。だけどもある日コーチから言われた。「キャプテン辞めてくれないか？」と。その転校生にキャプテンをしてほしいといったのだ。今まで私は部員のために気を使ってきた。優勝にだって導いてきた。頭が悪いわけじゃなかった。なのにいきなり辞めろといわれたの。今までの自分が崩れていった。そしてこの世に大切なものがなくなったから学校の屋上から、転校生とキャプテンの前に落ちて死んでやった。でも今

考えたから見返す事もできたじゃないかと思ってこの試練を選んだの。

「

私は愕然とした。「もう一度」の希望があるなんて・・・

「俺も似てる」

と真治は言った。

「俺は、サッカーの特待生で高校に入った。サッカーだけがとりえだった俺に、苦勞してこの高校に入った人達からは冷たい目で見られていたよ。ある日言われたんだ。「この高校に入った苦勞を知れ」って。その日からいじめられたよ。机に落書き平凡ないじめがこんなに悲しいないて思わなかったよ。それで、ストレスがたまつて死んだ。グサツとナイフでね。でもな、サッカーだけがとりえの俺なんだから、サッカーで見返してやればいいと思ってこの試練に来た。」

二つの話が聞き終わっても「何か」は来なかった。

紗希音が言った

「真治くんに共通しているかも」

「私は高校受験のときにすごく勉強したの。寝る間も惜しんで。受験の日も力を出し切った。しかし落ちていた。なんでなのか分からなくなった。実は裏口入学をしている人がいたらしいの。そのテストと私のテストをすり替えた。それを死んで恨んだわよ。ずっとずっとうらみ続けた。死んでしまえばアイツも自分のした事を償おうと思うんじゃないかって思った。そして、その学校の屋上で首吊り自殺。でもそれより上の高校に入っていればいいだけだったなあとおもって試練に参加したの」

椎名が言った

「この三人は共通してるね」

私自身驚いていた。希望を持ち続ける人間がいたなんて。

「僕は違います」

と優斗が言った。

「僕は高校に入ってがり勉強だといじめられ、いやになつて死にま

した。だけど、いじめに負けない強い心を鍛えるためにこの試練を選んだ」

皆、夢、希望があった、この話を聞いて私の話は、恥ずかしくてで
きない。

「風香はなんで死んだの？」

と問われた。

「私は・・・」

言葉がつまる。

「いじめられて、すべてがいらなくなって・・・死んだ」
あまりにもそっけない話だった。

「まあ人それぞれ悩みがあるものね」
と椎名がかばってくれた。

全員が話し終わったころ、暗い洞窟の中から一人の男がやってきた。
男は名前も言わずに

「ついて来い。試練をはじめる。」
といった。

これが「何か」なのか？

私達は不安を抱きながらついていった。

不幸が始まる場所へ・・・

第二話「自殺」（後書き）

続きを書くの遅くなりました・・・^^・三話も今考えてます・・・
^^；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4075d/>

地獄の生存者

2010年10月25日00時55分発行